

日英教育学会 2025年度第1回公開研究会

イギリス教育学の社会史

—学際化・国際化・社会的有用性は
何をもたらしたのか—

報告：三時 眞貴子氏（広島大学）

**日程： 2025年5月17日(土)
10：00～11：30**

開催： Zoom

**司会・企画：日英教育学会（担当：沖清豪、
片山勝茂、佐藤千津）**

お問い合わせ：okikiyo@waseda.jp（担当：沖）

〈事前登録〉

一般の方は以下のURLまたはQRコードから5月15日まで
にご登録ください。前日20時までに必要な情報を登録され
たメール宛てにお送りします。

参加費は無料です。

会員の事前登録は不要です。

<https://forms.gle/AVC5zt8j5YTFw3fU8>



イギリス教育学の社会史

—学際化・国際化・社会的有用性は何をもたらしたのか—

三時眞貴子（広島大学）

報告要旨

2014年、ロンドンで開催された国際教育史学会（International Standing Conference for History of Education, ISCHE）において、「教育史の学問としての地図を描く（Mapping the Discipline History of Education）」に関する常設ワーキンググループが設置された。2018年に最終報告書を出すまでに、この共同研究に関して15か国以上の教育史研究者が50を超える報告を行った。これと連動して、イギリスでは先のワーキンググループにも名を連ねたゲイリー・マッカロック(Gary McCulloch)ロンドン大学教授が、イギリス教育学会（Society for Educational Studies, SES）から研究助成を得て、「教育学の組織化—過去・現在・未来」という共同プロジェクトを行った。その成果の一部は、ゲイリー・マッカロック、スティーブン・コーワン著『イギリス教育学の社会史—学問としてのあり方をめぐる葛藤』として出版された。

こうした動きの背景には、教育史に限らず、人文社会科学系学問に生じている変化、すなわち、個人研究あるいは自国内の文脈だけで議論する研究ではもはや国際競争力を得ることはできないとして、国際的な共同研究プロジェクトを立ち上げ、これを出版することを強いられるという事態が大きく影響を与えている。こうした圧力が象徴しているように、「社会的有用性」や「競争力」という言葉が学問を語る際のキーワードになり、学問それ自体の価値が疑問視され、その存在意義が問われている。とりわけ教育学は、比較的新しい学問分野であり、かつイギリスやアメリカなど様々な国で学問としての地位が低いままであり続けているという事実は、イギリス教育学の学問としての在り方を問う必要性を、マッカロック教授をはじめとするイギリスの教育学研究者たちに強く自覚させたようである。

本研究会では、イギリスにおける20世紀から現在までの教育学の歴史を解き明かした『イギリス教育学の社会史』（小川佳万・三時眞貴子監訳、昭和堂、2023年）を手掛かりに、社会からの圧力と学問としての在り方をめぐるイギリスの教育学者たちの葛藤や奮闘を踏まえて、「学際化」「国際化」「社会的有用性」といった視点からイギリス教育学が置かれている状況と日本における教育学研究のこれからについて議論したい。